

Heroldo de HEL

N-ro35 marto-aprilo, 1990

北海道エスペラント連盟

068 岩見沢市1条東6丁目 法然寺気付

ORGANO DE

HOKKAJDA ESPERANTO-LIGO:

Iwamizawa-si, Itizyô, higasi-6-tyôme,

Hônenzi-kizuke, 068 Japanio

Ŝiaj leteroj estas miaj trezoroj
Kondolenco al s-ino Woessink-Nagata Akiko

YAMAGISI Etuko (Sapporo)

Kiel unu el la malnovaj amikoj de s-ino Woessink-Nagata- Akiko, mi kore esprimas mian profundan kondolencan pro ŝia forpaso. Kaj antaŭ ĉio mi kun gesamideanoj preĝas, ke ŝi ripozu kviete.

La redaktoro de nia organo petis min, ke mi skribu ian memorverkon pri ŝi. Ĉar ankoraŭ plene restas granda malĝojo en mia koro, mi ne povas paroli multon pri ŝi.

Kun ŝi, mi jam antaŭ longe amuziĝis kune en esperantujo de Sapporo, sed ŝi foriris al Roterdamo kaj mi edziniĝis. Do, dum longaj jaroj inter mi kaj ŝi daŭris silentado.

Antaŭ du jaroj, kiam mi intencis partopreni en la UK de Roterdamo, mi petis ŝin ke ankoraŭfoje ŝi instruu al mi esperanton per korespondado kaj korektu miajn erarojn. Ĉar ĝis tiu UK mi devis havi pli bonan kapablon de esperanto por plene ĝui esperantan etoson. Kompreneble ŝi volonte akceptis mian peton kaj agrable helpis min.

Ŝi tuj respondis min jene:

... Vi estas kuraĝa homo! Mi ĝuis legi vian leteron hodiaŭ matene.
Ĝi estas bone verkita! Iom post iom vi mem rimarkos, kiajn erarojn vi faris. Do, konservu fotokopiojn de viaj leteroj. Ne estu timema pri era-

永田明子さん追悼号

★Ŝiaj leteroj estas miaj trezoroj

YAMAGISI Etuko... 1

★世界市民としての永田さん 児玉広夫... 3

★永田明子さんの足跡を追って 星田淳... 5

★永田明子さんの遺された文 峰芳隆... 8

★Ĉiam strebe al tutmondeco

Nagata Akiko...10

roj. Ankaŭ mi faras de tempo al tempo erarojn kaj poste rimarkas pri ili. Skribu al mi jen kaj jen en esperanto, kiel vi faris en via unua(!) leteroj al mi. Mi respondos al viaj leteroj

Ŝi pacience skribis al mi kun diversaj temoj, ja estis korektigitaj stiloj en tie kaj ĉi tie. Mi sentis ŝian delikatecon agrablan.

Nun mi havas pli ol dudekojn da ŝiaj leteroj. Por mi ili estas karaj memoraĵoj kaj ankaŭ estas miaj trezoroj, kiuj estas bonaj tekstoj de mia esp-learnado.

Ja, nun mia esp-kapablo multe progresis kiel ŝia antaŭvido.

Ŝi estis vere homaranistino ĝentila kaj ŝi havis animon ĝojplenan, puran kaj ankaŭ modestecon, kvankam foje severema. Ne nur mi sed ankaŭ multaj esperantistoj en la mondo ricevis ŝian komplezon, ĉu rekta aŭ ne rekta, tiel mi kredas.

Mi pli altigu mian esp-kapablon, kaj ni havu kuraĝe kaj multfoje la ŝancon interbabili en esperanto. Ŝi tion plej deziras kredeble.

シェフチェンコとソビエト展に協力

苫小牧エスペラント会

苫小牧民報創刊40周年記念行事として 3月 1日から 6日まで市内表町のサンプラザ・ギャラリーで「シェフチェンコとソビエト展」が同社主催であり、日ソ協会苫小牧支部、在札幌ソ連総領事館、鑑地詩会とともに苫小牧エスペラント会も協力して、準備、会場詰、来訪者への説明にあたった。

ウクライナの国民詩人、作家、画家として知られ、同時に革命家でもあった彼については、古くは Literatura Mondo (1934, 3-a n-ro) 以来、最近の PACO や昨年 4月の Moskvoj Novaĵojまで何度も紹介されている。また昨年の生誕 175周年記念詩集にはエスペラント訳のほかエスペラントを pontolingvo とした訳文も取められている。

(星田 淳)

札幌春季入門教室開講

札幌の春の入門講座が 4月21日(土)から20週の子定て開講した。会場はいままでどおり北区北7条西6丁目北海道クリスチャンセンター内北海道マスコミ伝導センター事務所で、毎週土曜日午後1時半から2時間、講師は引き続き宮岸忠孝があたる。受講料は1ヶ月1000円、他に教材費6000円(エス和辞典を含む)。

昨年秋の入門講座は8人の受講生でスタートして、終了したのは6名。今回も新聞各社に告知を依頼して市民に受講をよびかけている。また、講習に出席できない希望者には通信教育も用意されている。問合わせは上記講習会場の宮岸まで。

電話 011-736-0104

(宮岸忠孝)

各地方会、専門団体、個人の活動報告、情報を編集部までお寄せください。締切りはありません。

世界市民としての永田さん（1）

札幌 児玉広夫

1月19日（金）夕方、帰宅して一通の見なれぬ外国郵便に目が止まった。グレー色で縁とられた封書でよく見ると宛名書きタイプ文字は、紛れもないUEAからのものである。

開封して私は仰天した。

“Subite s-ino Akiko-Uusink-Nagata for-lasis nin, en la 13-a de febrero '90” とある。そして“告別式は1月18日午後3時からアルンヘムで執り行なう”とある。昨日だ！ 誤報であれとの願いは無残にも打砕かれた思いだ。

昨年12月下旬、例年どおり彼女から年賀状が届き、私は遅れて1月2日航空便で返信を出した。

追伸で、“東欧の激動はヨーロッパエスペラント連合の樹立に拍車がかかるだろう”と記し、彼女のいっそうの活躍を期待したのだが、...

私は、今までに山賀 勇先生、相沢治雄さん、平田岩雄さん、吉田 栄さんなどの大先輩が次々にこの世を去り、“緑の巨星また一つ墜つ”の感を深めていたが、今回のように、私より若くしかも世界のエス運動発展のため将来を囑望されていた緑の戦士永田明子さんが忽然と、私より早く逝かれるということは、誠に残念でならない。

願みて、私が初めて彼女とお会いしたのは、今から36年前にならうか、当時、北大通りに面した人事院札幌事務所の一室を借りて開かれた初級講習会の会場である。その頃は、高校生の西里静彦君（アメリカに留学、現在はカナダ国籍を有し大学教授として活躍中）や、数人の若い学生が集まり活気を呈していた。

明子さんは藤短大英文科の学生で、その時私に学生新聞をみせてくれた。見ると、彼女が投稿

した“世界連邦とエスペラント”と題する記事が載っている。あのお嬢様学校の生徒にしては何としっかりした学生だろうというのが私の第一印象であった。

それから私は3年間の東京勤務を終え、再び彼女と会ったときは、北大生の西里静彦君と共に押しも押されもせぬ若手活動家となっていた。

その一部を紹介しよう。

1960年春だったろうか、ユーゴの有名な人類学者 Tibor Sekerij 氏が来札の折、進んで市内案内をかって出て、自分の持てる会話能力を存分に発揮していた。Tibor 氏自身も余程頼母しく感じたのか、明子さんが途中で単語を思い出せず間をおいた時、私がつい助け船を出そうとすると、氏はさあつと私を遮り、じ〜つと彼女の次の言葉を待っているのだ。以来私は、良き教師とはかくあるべしと Tibor 氏を敬い、会話上達の秘訣は永田明子さんのように勇気であるべしとの思いを深めたのである。

永田明子さんは、卒業後 平取高校の英語教師を勤め、程無くそこを辞して国家公務員採用試験に合格し、北大理学部の田部浩三教授の研究室勤務となった。それから1968年、ロッテルダムのUEA事務局に勤務するまでの約8年間は、彼女にとって最も充実した青春時代であり、またエスペラントに情熱を燃やした時でもあったと思う。（彼女が本業以外にエスペラントや世界連邦の運動に活躍できたのは、当時の田部教授の温かい理解があったればこそと、明子さんが述懐されていたことを今思い出す。）

彼女の活躍ぶりを思い出すままに述べると、

その一つは、札幌の姉妹都市ポートランドのエスペラント会との交流である。それは、世界連邦の理念と相通ずる同市の“世界理解委員会 (Mondvida Komitato)”の主力メンバーがエスペランチストであることから、両市のエスペラント会が年に一度、同時集会を開いた。その日を“世界理解の日 (Mondvida Tago)”と定め、平和について世界的にものを考えるという催しである。その日は、春分、夏至、秋分、冬至の中から選ばれる。そして、その日互いに交換し合ったケーキを食べかつ録音テープ（平和のメッセージ）を聞きながら友情を深めようというのだ。二度ほどテレビ局が取材に来てその様子を放映されたことが思い出されて懐かしい。この企画と実行はすべて彼女の手で行われた。

次に、～UEA月刊誌の追悼記事にも触れられているように～永田明子さんが世界連邦建設同盟主催の論文コンテストに1位入選し、そのプレミアムとしてサンフランシスコで開催の同盟主催の世界大会に招かれた。そのときの彼女の晴舞台が今でもくっきりと私の脳裏に刻まれている。そのスライド写真では、振袖姿の明子さんが湯川秀樹ご夫妻やポートランド市からも参加された S-ro Jim Deer会長その他のエスペランチスト達に囲まれ祝福されている姿だ。明るく微笑んでいる彼女はまさに幸福の絶頂ともいえるべきか。

このように明るく、ひたむきなまでに純粋な永田明子さんの、もうひとつ隠れた一面を紹介したいと思う。それは私と彼女との長い、共働のエスペラント運動を通じたエピソードでもある。

確か、1965年、東京で初めて世界大会が開かれる直前であったかと思う。折しも、ベトナム戦争が激烈を極め、遂にアメリカ空軍が無差別な北爆

を開始した時である。彼女は真剣なまなざしで“今度の北海道大会で、北爆の即時中止を決議しよう”というのだ。当時の新聞等で、多数の婦女子が北爆の犠牲となっていること、革新勢力、労働界が挙げて抗議行動をとっていることが報じられていた。しかし私は反対して議らなかつた。表向きの理由は何であれ、当時私は道庁人事課に籍をおき、周りからへんなレッテルの貼られることを極端に恐れていたからだ。明子さんが「エスペランチストは行動しなければなりません！」といったときは最も険悪な対立関係にあった。

彼女の心情は痛いほど分っても、それに賛同できない自分の不甲斐なさに怒りが増幅したのだ。

永田さんが学生時代すでに、民族の一員でなく世界市民の一員であると自覚し、世界連邦の建設やエスペラント運動に若い情熱を燃やして来たのは、それなりの理由がある。それは彼女の少女体験と深く係わっていると私は考える。

未だいたいけな小学校3年生の時、当時の満州国撫順市で終戦を迎え、それまで両親の温かい庇護の下、4人の弟妹と平穏な日々を過ごしていたのが一朝にして一変する体験を持つ。しかも、近所の中国・ソ連の子供達と無心に遊び戯れていたのが終戦を境に引裂かれてしまい、また、東北地方から逃避行を続け、やっとの思いで撫順市に辿りついた、か弱い婦女子が次々に倒れていく様子を目の当りにし、子供心に戦争への憎しみと平和への願望が強く育まれたに違いない。彼女の一貫した主義・思想の原点はどうもここにあると、私には思えてならないのである。（つづく）

永田明子さんのご冥福をつつしんでお祈り申し上げます。 北海道エスペラント連盟

Ĉiam strebe al tutmondeco —

永田明子さんの足跡を追って

星田 淳 (苫小牧)

北海道から世界のEsp-ujō に乗り出し、国際的な場で活躍していた S-ino Akiko Uusink-Nagata (永田明子さん) が 1月13日亡くなったとの知らせは、多くの人々を驚かせた。国内関係者に送られてきた葬儀通知には「不慮の死」と日本語の書込みがあったが、それ以上は説明されていない。

Ĉiam strebe al tutmondeco — この言葉は世界エスペラント協会 (UEA) 機関誌 esperanto における彼女の最後の文になった89年 5月号の記事 (自分の esperanto 誌編集担当の頃をふりかえった文) の標題である。死の8ヶ月前の文。今にして思えば、「私の一生はこれを目標に、こう歩んで来た……」ということをし、この短い標題で示してくれたような結果になった。(全文は10p. に転載。編集部)

彼女が歩んだ道をたどってみると、札幌のEsp-ujō で活動した初めの頃から、はっきりした信念をもって活動し、最後までその考えは一貫して変らなかった。

Esp-ajō に彼女の名が初めて出たのは1956年のこと。「56年 4月、藤女子短大に、英文2年の永田明子さんを中心にEsp. 研究会ができた……」という記事が Leontodo (当時の北海道エスペラント連盟機関誌) に出ている。すでに日本エスペラント学会 (J E I) 会員だった。翌年卒業して、日高の平取高校に英語教師として赴任した。当時同じ借家で同居していた同僚教師、対島幸子さんは「あの人は実にしっかりした人だから、生徒から“とうちゃん先生”とあだ名 をつけられていた」と語っている。

彼女のEsp. 文は1960年から Leontodo にあらわれている。この頃、彼女は教師をやめ、札幌にもどっていた。1960年、ユーゴの Tibor Sekelj の日本各地訪問は、わが国のEsp-ujō に大いなる影響を与えた。彼は札幌、白老、平取、二風谷を訪れたが、彼女や私が書いた記事が当時の Leontodo に出ている。彼女の文はこの頃から頻りにあらわれるが、Esp. 文が殆どだった。北海道新聞婦人欄の「エスペラントを学ぶ女性たち」(1964年 6月 20日) に顔を出したのもこの頃だった。

当時の札幌エスペラント会 (SES) 会長S-ro 吉原正八郎が熱心だった世界連邦運動に参加し、その懸賞論文に入選したこと、そしてその結果サンフランシスコでの世界連邦大会 (1965年) に参加したことは、彼女にとって大きな意味があったように見える。

入選した論文は『朝日ジャーナル』に掲載されたが、「女性の書く論文としては特異なもの」との印象を受けた人が多かったと思う。確かにそのとおりで国連常備軍について論じたその内容は、「国連に力がないのは自らの軍隊がないからだ」とし明治維新の際、各封建藩主に対する忠誠心のみの当時の武士でなく、中央政府のための軍隊をどうやって作っていったかを史料によって述べたものだった (この論文にたいする批判に永田さんと峰芳隆さんが同誌上で答えている。8p. に転載。編集部)。esperanto (jan. 1990) では Pacarmeo de UN (国連平和軍) としているが誤りで、Konstanta Armeo (常備軍) が彼女の趣旨だった。

そのサンフランシスコの大会で彼女は大きな不

条理、不当にたいする怒りを感じることとなる。大会の公用語は英語、フランス語、日本語で、米国以外からの最多の参加者は日本人（180人）だったのに、日本語は無視されることが多く、役員立候補手続き説明は英語だけで行われたため、日本人は一人も役員に入れなかったり、討論の中で日本語通訳をやっていると「手間どって面倒」と日本人だけ別グループにされたり、また日本側代表に「英語を話す人」と条件を付けられるなどのことが次々にあった。青年代表部会でもイヤホン故障との理由で英語のみ、現地のエスペランチストの協力でようやく日本の青年代表数人の一人として参加し、たびたび日本語での説明を要求して無視されるが、「国際語問題委員会」を作ることを決めさせ、不当な差別の前で沈黙してはならない、との決意をもって帰国した（*Sed ili volas unuigi la mondon: Leontodo, N-ro 34, 1966*）。

1968年の札幌での日本エスペラント大会はその2年前から準備をすすめ、北海道エスペラント連盟の総力をあげて開催されたが、その準備の中心になってみんなを動かしていったのは、彼女の力によるところだった。この頃からの彼女は方針、見通しにいつも自分の判断をはっきりもっており、自信ある態度だったと、思い出される。会合で何か歌をと歌集をさがすとき、北海道で出された楽譜入りの本格的な歌集は彼女の手作りの一冊だけだった、ということも思い出す。これもこの頃のことだった。

68年の日本大会をやり終えてすぐの8月末、彼女は日本を離れ、UEA本部（ロッテルダム）の職員として勤める。自分の抱負を国際的舞台上で生かしていくことになり、70～73年は機関誌 *esperanto* の編集を殆ど一人で切りまわす。その頃の話は、上記の *esperanto* 誌の文で彼女自身が書

いている。

この標題 *Ĉiam strebe al tutmondeco* は彼女自身がかけたものだが、私にはその前に次の言葉が隠されているような気がする。“*Post rekono de diverseco kaj egaleco*”だ、彼女のそれまでの行動から見れば。

Leontodo に寄稿し始めてすぐ、Esp. 文で *Japanaj Literoj* と題して日本の文字を文通相手に説明する長い文を書いている。オランダに移ってからSESに向うの菓子を送ってきた。口にしたら「何これ？」と驚くような味、奇妙な味とゴムのような歯ざわり、喉を通さなかった人が多かったと思う。ところがオランダでは子どもたちが小さいときから親しむ大好物とのこと。世界には自分たちの想像できぬもの、知らぬもの、好みも多い — これを実感してもらうために彼女が意識的にわれわれに送ってきたのだった。

UEAではヨーロッパ人が殆どわからぬ日本の文字、人名表記の複雑さ、その他をまわりの人に説明するのに大いに苦勞した。このような *diverseco* の認識の上で、そのすべてが人間の行為として *egalaj rajtoj* をもつものと認め、そのすべてを包含した *tutmondeco* をEsp. 運動の中に求め、構築していこうとした。“*mi decidis agi kaj pensi supernacie*”というその真意は、かつて世界連邦大会で受けた不当な差別を自分はUEA = Esp. 運動の中では絶対に行わない、とする決意だったろう。

そのために、世界エスペラント大会（UK）などの場でも、日本人参加者にたいしても親しげな態度は特に示さない、とまで心がけて中立の国際組織の人間であることを自戒していた。ヨーロッパに行ってから旧友にたいして冷淡になった、と感じた人がもしいたら、それは彼女の自らを律す

る決意の結果だったかもしれない。

彼女の名を特に高く（？、反論も多かった）したのは、1986年北京UKの言語部会で発表したヨーロッパ的専門用語の排撃論だった。私はその場にいたが、欧米の論者の「暴論だ」との反論が次々に出るなか、支持したのは日本、中国、韓国のアジア人と、“Mi subtenas mian edzinon”と笑っていた S-ro Everto だった。

UEAの追悼文では、初めのところで“kvazaŭ

personigis internaciismon por ni”とのべながら、最後のあたりでは“Sia sennaciismo”の行きすぎをほのめかしている。彼女自身が前記の文で書いた supernaciismoのことだろう。はたして彼女のsupernaciismoはsennaciismoなのかどうか？ 彼女自身はもはや答えることのない今、われわれが彼女のめざした“tutmondeco”の構築を考えていかねばならない。

永田明子さんの略歴

- 1936 旧「満州国」（現中国東北部）撫順にて出生
- 1956. 3. このときにはJ E I（日本エスペラント学会会員（Leontodo名簿）
- 4. 札幌の藤女子短大英文科2年のとき、エスペラント研究会設立
- 1957. 4. 藤女子短大卒業
- 2. 北海道立平取高校に英語教師として赴任
- 1960 2. 教師を辞し、北海道大学事務職員として働きながらエスペラント運動に積極的に係わりとともに世界連邦運動に参加
- 1965. 6. 世界連邦運動の懸賞論文に当選、サンフランシスコの世界連邦大会に参加
- 1968. 札幌で行われた第55回日本エスペラント大会準備に奮闘

- 1968. 8. 渡欧。ロッテルダムのUEA（世界エスペラント協会）本部職員として働く
- 1970-73 UEA機関誌esperantoを編集。ほかにLa Praktiko、La Monda Lingvo-programoとJarlibroの編集にも係わる
- 1972. 5. UEA役員Evert J. Woessinkと結婚、翌年UEA本部を離れる
- 1976. 4. UEAのUN kaj Niの編集を担当（約10年間）
- 1977-79 オランダ・エスペラント協会会長
- 1986. 8. 北京の第71回世界エスペラント大会でエスペラント専門語の非ヨーロッパ化につき大胆な提案、世界的な論争を起こす
- 1990. 1. 13 自宅で死去

（星田淳作製）

★オランダ事情、永田明子。東京：鎌倉書房刊 1980、255p。オランダに在住した日本人からみた「偉大な小国」の実像。980円。

★Sarkasme kaj entuziasme, Miyamoto masao. 峰芳隆編、高砂：La Kritikanto社刊、1979、151p。権威におもねることなくE-ujjoのヨーロ

ロッパ中心主義を撃ち、フツウの人のエリも正させる辛口のエスペラント論集。1500円。

★JAPANAJ VINTRAJ FABELOJ, Miyamoto masao. SAT刊、1989、153p。蔓延するEsperanto-sindromo早期治療の特効薬。980円。《注文は書店で。日本エス学会発行と指定》

永田明子さんの遺された文

兵庫県 峰 芳隆

前号で、永田明子さんが亡くなられたことを知り、驚きました。私が永田さんのことを知ったのは、1965年春のことです。当時、朝日新聞の「ひと」欄に、世界連邦建設同盟の募集した論文の第1位に入選した人で、札幌エスペラント会に所属するエスペランチストであると、紹介されました。

永田さんの論文「国連常備軍への具体的提言」は、朝日ジャーナル65年 5月16日号に掲載されました。それは、いま手元にはありませんが、世界の平和を維持するための国連軍は、既存の国家の軍隊の寄せ集めでは限界があり、明治維新の廃藩置県において中央集権政府が有した自前の軍隊の果たした役割を参考にして、国連主体の超国家的なもの、すなわち、個人募集によることが必要である、という主旨だった、と思います。これに対して、次号に読者からの、しかし共通語はどうするのか、という指摘が載りました。

「朝日ジャーナル」
読者から
1965年 6月13日号

エスペラントを国連に

<1> 永田明子

私の「国連常備軍への具体的提案」(5月16日号)〔峰注:「朝日ジャーナル」の懸賞論文の第一席入選論文〕に対し、国連警察隊設置にともなって必要となる共通語の問題を指摘されましたので(5月23日号読者欄「国連軍への疑問」柴谷篤弘広島大学教授)、日ごろ考えているところを述べてみたいとおもいます。

柴谷先生のお説のとおり国連警察隊を英語隊、ロシア語隊というふうに編成するのは、各国軍隊そのままを供出するのと大差がなく、個人募集の

私は、エスペランチストとしての永田さんの反論を期待しましたが、その翌週には出なかったの、自らペンをとり投稿しました。ところが、6月13日号には、永田さんの反論「エスペラントを国連へ」が載り、それを補足するかたちで私の投稿も併載されました。私の文はもっと長かったと思いますが、永田さんの文と重複したため、かなり短縮されました。今では、この文を記憶している人はもうほとんどいないと思いますので、お送りします。

兵庫県高砂市の本誌購読者、みね・よしたかさから貴重な資料を送っていただきました。どうもありがとうございます。峰さんは La Movado 3月号に故・永田さんへの追悼文を書いています。この機会に La Movado もお読みください。La Movadoの購読申し込み先は 9p. に。(編集部)

趣旨にそいません。個人募集による隊編成は特定の国色が出ることのないように、さまざまな国の出身者の混成とすることが肝要です。

そこで、それが敏速な行動をとるために当然要求されるのは、通訳を経る必要のない一つの共通語を採用することです。その共通語はもちろんだこの国のことばでもないことが大切です。日本人がロシア語や中国語で号令をかけられた場合に、おそらくころよくおもわれないと同様に、英語の号令はたとえ英語のわかるフランス人やロシア人でも、耳にころよくひびかないでしょう。

国連という人類共同の機関が、ある特定の国のことばを公用語に採用して、その国を他の国よりも有利な地位におくことは、厳につつしむべきことであるとおもいます。したがって中立性をみた

す共通語とは、すなわち人工語にほかなりません。

幸いにしてこれまでに国際語の問題を考えた人たちの手で、いくつかのことばが考案されてきました。そのなかで残っている唯一の言語は、70余年の歴史をもち、年々盛んになっていくエスペラントです。ユネスコはその成果をかい、1954年の総会で、エスペラントがユネスコの目的と理念に合致することを認め、これと協力することを決意し、現在、世界エスペラント協会をユネスコの諮問機関としています。

したがって、さしあたっては国連警察に入隊したときに、エスペラントを教えるほうがよいでしょう。エスペラントは、学習がきわめて容易で、二ヶ月の合宿訓練で十分こなせます。最初のうちは号令や公用文書からエスペラントを使用しはじめるのが、抵抗なく実施できる方法です。

一方、国連軍ばかりでなく、オリンピックや各種の国際会議でも、共通言語のないことからくる不便さがうんぬんされています。各種の国際条約は、多くの場合、正文が二ヶ国語以上あります。将来世界中のすべての人びとに平等なはずの世界法ができて、いまの国連憲章のようにいくつかの国語を正文とし、以後公文書が出されるたびに数ヶ国語に訳していたのでは手間・経費・時間の浪費はもとより、不平等の問題も解決しません。今後は世界中の小中学校で国際語の役割をする人工語を教えて（オランダ、イギリスでは一部すでに実施）、すべての人に平等な基盤をつくったほうが、国際的感覚の養成にも役立つのではないのでしょうか。（札幌市・北大触媒研究所員）

<2> 峰 芳隆

永田明子さんが札幌エスペラント会に属する有能なエスペランチストであることを知れば、柴谷篤弘教授の疑問は、氷解するでしょう。将来の人類社会における“共通言語”は、エスペラントであるとするエスペランチストにとって、その言語の問題は、いまさらとりあげるまでもない当然す

ぎることだったのでは、と思います。

エスペラントが国際語であることは、もはや社会的事実であり、それが78年の、言語としては驚くほど短い期間に、いかに大きな発展をとげ、それ自身生きたものになったかは、容易にわかります。

今年に国際協力年ですが、いま世界中のエスペランチストは、世界エスペラント協会（本部ロッテルダム。ユネスコと協力関係にあり、本年度ノーベル平和賞候補）の提唱のもとに、国連公用語、および学校教育へ導入のための、請願署名運動を展開しています（3月25日現在集計1100余万名）。

しかし、エスペラント運動の歩んだ苦難の道は、そのまま人類の現代史といえます。現在、人間の社会は、民族集団から、人類集団へと歩みはじめましたが、私たちは、日本のとくに若い世代が、自分たちの判断でエスペラントを考えはじめることを切望しています。

（兵庫県高砂市・会社員・23歳）

La Movado

毎号、北海道からのニュースものつて
ます。2月号に札幌・苫小牧の乙祭、3
月号に永田明子さん追悼（峰芳隆）。

北海道大会が抜け落ちることもあるが、
あとで追加するところが良心のあかし。

日本エスペラント界の良心、

北斗七星、ラ・モバードを読もう

月刊 16p. 年間購読料3200円
振替：大阪 6-60436 ラ・モバード社

（この広告は Heroldo de HEL 編集部が勝手に掲載したものです）

ここに載録する“Ĉiam strebe al tutmondeco”
は故・永田明子さんが編集に携わった esperanto
(世界エスペラント協会機関誌)第1000号記念号

(89/majo)に掲載されたもので、この短文が若い読者の女史を知り、また Esperantismo を考える契機となることを期待する。(編集部)

Ĉiam strebe al tutmondeco

Nagata Akiko

Kiam mi redaktis la revuon Esperanto, inter 1970 kaj 1973, estis super mi Victor Sadler kiel la ĉefredaktoro. Ĉar li estis samtempe la direktoro de la Oficejo, li lasis al mi multon de la redakta laboro.

Tamen mi devis okupiĝi ankaŭ teknike pri la redaktado de la Jarlibro, La praktiko kaj La monda lingvo-problemo, kaj pri iom da korespondado. Fakte ne estis facile redakti eĉ unu monatan revuon, ne disponante 10-12 horojn tage, ĉar la redaktistaro tiam devis fari ĉion. Ne estis aliaj oficistoj, kiuj sub la redaktistoj laboris.

Por mi unu el la piezuraj flankoj de la laboro estis la grafika aranĝo, ekzemple ekspluati la kovrilan koloron ankaŭ sur la internaj paĝoj sen ekstra kosto. Problemo estis, ke ne ĉiam restis ĉe niaj manoj bonaj fotoj kaj bildoj.

Ĉiuj manuskriptoj kompostitaj por la revuo estis fotokopie sendataj al la tiama prezidanto de UEA (Ivo Lapenna). Normale li ne reagis pri tiu aŭ alia artikolo. Kiel redaktoro mi dufoje rifuzis manuskriptojn de la prezidanto. Unufoje la teksto, kiu ne portis lian subskribon, tamen aperis post forigo de kelkaj linioj. La alia malakcepto temis pri ĉ. 5-paĝa refuta artikolo. En ambaŭ kazoj mi estis preta akcepti eventualan maldungon.

Redaktante, oni ofte renkontas novajn vortojn en manuskriptoj. Eĉ se ili troviĝas en Plena Ilustrita Vortaro, PIV-on posedas nur limigita nombro da esperantistoj. La konscienco riproĉis pro allaso de tiuj vortoj. Simile, kiam mi eklaboris en la Centra Oficejo, mi decidis agi kaj pensi supernaciece. Estis speco de de tabuo paroli kaj presi en la revuo pri sezonoj. Ankaŭ pri religioj: se la kristanisma pasko aperas en la revuo, kial ne la budhisma urabono? Kun mia supernaciismo ne kongruis la uzo de la kristana jaro en la revuo de UEA. Kiel trakti la islaman jaron aŭ aliajn jarojn de aliaj landoj? Bolis mia justosento, sed mankis alternativo.

Por egale trakti la diversajn naciojn de nia membraro (tiam naŭ dekoj da landoj), mi eĉ iom tro ekstreme agis. Dum la Universalaj Kongresoj, kiujn mi ĉeestis kiel redaktisto, mi evitis paroli kun japanaj kongresanoj por ne impresi, ke mi iel favorus la japanan popolon antaŭ la tutmonda membraro.

90合宿実行委員会から

1990年北海道エスペラント合宿(5/3-4-5 札幌市南区滝野丘陵公園・札幌市青少年山の家)には26名の参加申込みがありました。東京の菊島和子さん、横浜の中村栄治さんは遠路はるばるの参

加です。菊島講師にシゴかれるのを楽しみにして申し込んだツワモノもいます。

鳥取の切替英雄さん、常呂の横島君枝さんは、「不在参加」で応援してくれています。

合宿の様子は次号でお伝えします。(B)

読書ノートから

須藤 昭三

“Kromosomoj” Lorjak 著
(ベルギー、1989年刊、155p. 1200円)

面白くなければ何日もかかって読めるものではない。これは少し読みづらいな、でも30頁も読み進むと馴れるかも知れないと、最初考えていたが最後まで私の無能な頭を絞ることになった。困難だったが、この人のものをまた読みたいと思っている。

作者に対する intervjuo で、あなたの言語的な“奇異なこと”に文句が言われるが——との問いに、それをみんなは“習慣に”向けている、私はエスペラントのメカニズムより、より記憶に位置をしめる習慣を嫌う、と答える。“Prezidisto”と言うし、mie, vie, nie と副詞的に使う、とあるように、kialas, demandaro, rideroなど出てきて面食らう。

この物語のテーマは二つあって、一つは人工授精、もう一つは両親の性格（この場合、殺人本能）は遺伝するか否かであるが、あまり本気に考えすぎることはない、軽い気晴らしの読み物だ、と前書きにはある。

同棲生活40年になる、ある老夫婦が公式に結婚する決意をする。市長閣下がその宣言で夫の名前を犯罪者と読み違える。その犯罪者というのは60年前15人もの女性を結婚の名のもとに消し去った、犯罪史上でも有名なランドル事件といわれるものであった。

この夫妻の間にセレステン、あだ名をTintin という（聞いてニヤリ?とするような）

息子がいるはず——というのは正常出産出来ない体質であった妻（ミレラ）が妊娠したとき、中絶を拒否した彼女が双子姉妹であることをつきとめた医師団が、そのとき数週間のミレラの子宮からエミリア（双子の片方）のそれに移植したのだった。

成長したこの息子は両方をお母さんと呼んで姉妹の争いの種にした（エミリアの夫から見ればこんな場合どうなんでしょうね、姦通？ 代理母親？）。35歳になる背の高い美型なこの息子は定職をもたない困り者だった。

市長の宣言にあったランドルはギロチンの露と消えた殺人者の名前で、残された家族のために申請によって裁判所がその家族名を消したものだだったが、原本からメモにして市長に渡すときに職員が誤って記入したものか、ということは自分の夫は殺人者の子どもであり、その息子 Tintin はその孫となるのではないか。事実、息子の雇い主が次々と怪死しその都度 Tintin が疑われる。

夫が仕事で二日ほど家を留守にした夜中に、学校の理事が子どもの親と現認者を連れて怒鳴り込んで来る。娘が学校から帰らないが、お宅の主人が学校帰りの娘を車に乗せたところを見たという。誘拐か？ ミレラは夫に内緒で60年前のランドル事件の調査に乗りだす。

この事件を手がけた元警官、夫の腹違いの妹という女性、町の大司教。物の本によると、殺人者の特徴として手の親指が他の指と長さが同じだという。ミレラが息子の指を見ると何と同じではないか。ミレラに不安な、眠れない夜が続く。

(室蘭エスペラント会)

エスペラント運動私史（3）

小樽 山本昭二郎

独学で習得した謄写技術

昔の LEONTODO の頃を書いて下さい、と若い人たちがいう。ちょうど40年前のこととなる。戦争が終わり、なお2、3年は食糧難が続いたが、私たち国民を今まで抑圧していた強大な権力たる軍隊、非民主的警察、官僚主義がみるみる消滅していった時期である。今の東欧の劇的な政治形態の変革をみると、40年前の我が国とそっくりだ、と思う。我が国の指導者たちはアメリカと結びつくのが復興には一番と判断し、アメリカの文化、経済、政治をとり入れた。ついでに大統領制も導入すればなお良かったのだが、政治的音痴の私たちはそこまで考えが及ばなかった。なにせ徳川幕府300年と合わせて約400年間も主権在君できたから、突然の自由、解放にとまどってしまったのだ。



LEONTODO 第5号（1953年3月）

私がエスペラントの初歩を学習し、ぼちぼち山賀眼科の山賀勇先生宅の例会にも行くようになって、日本各地からの Organo や Gazeto (La Revuo Orienta など)、また世界各国のエスペラントの印刷物 (Heroldo de Esperanto など) をみて感動した。国内各地の Grupo の機関誌は大半がガリ版 (謄写印刷) で、なかにはプロ級の非常にきれいなものもあった (和歌山の Grupo だったか?)。ここに詳細な誌名を列記できないが、毎月寄贈されたのは10誌もあったろうか。

山賀先生主宰の小樽エスペラント協会 (Asocieto) も VERDA HAVENO というのをを出していた。私の学習がやや熱心になった頃は中断していたようだ。小樽でもまた復刊の方がよい、と思い、私は個人でガリ版の研究を始めた。最初に東京の孔版研究所の通信教育を受講することにした。ここは謄写版 (孔版ともいう) のプロを旨とするもので、私はヤスリとか和紙の蠟原紙とか、印刷機など触ったこともなかった。役所とか会社に勤めている人たちなら、仕事の一部として覚えられるが、私にはそんな機会がなかった。ところが札幌の少年時代からの友人が、すぐ近所に流行っているガリ版印刷店がある、と行って案内してくれた。この主人は元中学校教師とかで、内職にしていたガリ版が儲かるので本職にした、という噂であった。ヤスリを見せて下さいというと、親切にヤスリの種類 (単目、斜線、方眼、絵画、アート) と用途を説明してくれた。方眼はゴシック体用、斜線は楷書体用、絵画はカットやべたつぶし用という風に。

この通信教育は印刷用品も扱っていたので、乏しい小遣いのなかからヤスリ、原紙、インク (平版インク) を注文した。私は字を覚えるよりも絵

画や印刷の方に熱中した。チューブに入った色インクは灯油で少しゆるめて使うが、缶入り(250g)の平版インクはコールドロールみたく固くて、灯油でゆるめるのは難儀だった。とくに絵画印刷の場合は固からず、ゆるからずで、今でも年賀状の印刷に苦勞する。

LEONTODO のはじめの頃

1952年6月だったか、N-ro 1のLEONTODOを出したが、以降毎月出すつもりだったが、しかし原稿はそうそう集まる訳でなく、結局2、3ヶ月に1回の発行となった。小樽のエスペラント協会ですのだからと小さなGrupoのことしか念頭になかった。今まで学習して覚えた語彙を駆使してEsperantoの作文集を出すくらいのもりだった。だから一般のOrganoのように運動の記事は最初の頃は少なかった。それに私自身の障害で、各地の大会や交流会の報告記事は書けなかった。

LEONTODOというネーミングは北国のタンポポのように、黙々と風雪に耐えて開花し、仲間を殖やす雑草の強さ、明るさに希望をこめたものである。エスペラントにはこの雑草の強さが必要であると思った。

LEONTODOの若い号のpaĝojやprezoなどを書いてみよう。

N-ro 1	60部	23頁	定価10円	送料 8円
N-ro 2	80部	23頁	10円	8円
N-ro 3	120部	34頁	10円	8円
N-ro 4	120部	34頁	15円	8円
N-ro 5	120部	34頁	15円	8円
N-ro 6	120部	31頁	15円	8円
N-ro 7	120部	35頁	30円	8円
N-ro 8	120部	31頁	30円	8円
N-ro 9	120部	28頁	40円	8円
N-ro 10	120部	34頁	40円	8円

このprezo 10円→40円はインフレの反映である。

当時、私は倉庫の荷役の仕事に従事していて、給料は日給 350円くらいだった。市の失対(失業対策事業の略)の労賃は百円札2枚と10円玉4枚の240円で、いわゆる“ニコヨン”といわれていた。私はそれよりずっと良かった訳である。しかし独身だったし、親兄弟と同居の家計が私の収入をあてにしていたので、大半を家に入れ、私の小遣いといったら月1000円位だった。その頃の私はまだ酒の美味も知らず、まったくの真面目人間だった。

その頃、LEONTODOを1回出すのに費用が2000円くらいかかったが、山賀先生に大半を買上げていただいたりした。その頃の収支は書きっぱなしでよく判らない。費用を切りつめた一例として、N-ro 1からN-ro 10までは化粧裁ちしていない。これは、製本が終わると、その本の背以外の三方(上・下・右横)を規格に従って^{セツパン}截断することで、これをプロの印刷店に依頼すると300円くらいとられるので、15円の誌代が18円にもなってしまう。当時はこのLEONTODOがまさかN-ro 68まで続くとは思わなかったので、何もかも間に合わせのものであった。N-ro 11あたりから少し体裁良くなったが、これは全道的なものになったからである。

今LEONTODOの若い号をざっと読んでみると、活気があってなかなか面白い。どんな人にもその人生にいろいろとエピソードがあるもので、たまたまEsperantoに若いとき、あるいは中年に遭遇し、その思い出を書く、という寄稿が多い。

次回は私と多少の交流のあった人たちのことなど書いてみたい。たとえば中沢天眼さん(ペンネーム=花園凡太郎)のことなど書いてみたい。

(90, marto, 6) つづく

LEONTODOは第11号から北海道エスペラント連盟の機関誌になり、83年以降休刊中。編集部

TRIA VIZITO AL JAPANIO

Josef MAJOR

Mia unua vizito mergiĝas en la nebulo de la antaŭmilita epoko. Veturinte perŝipe el Nov-Zelando, mi surlandiĝis en la haveno de Kobe la 13-an de februaro 1932 kaj mi loĝis en Japanio ĝis 1936, do iom pli ol kvar jarojn. Du jaroj de tiu periodo estis dediĉitaj ekskluzive al Esperanto. La dua vizito estisen 1969 kiam, akompanata de mia edzino Eva, mi faris dumonatan prelegvojaĝon en Japanio releviĝanta el la cindroj de la katastrofo. La tria vizito okazis inter la 14-a de septembro kaj la 14-a de oktobro 1989.

Hodiaŭ ni veturas al la fora Sapporo, ĉefurbo de Hokkaido, la nordinsulo.

Tiu ĉi estas laciga tago ĉar ni vojaĝos dum 12 horoj ŝanĝante trajnon trifoje por vespere alveni en Sapporo. Nia trajno pasas tra grandioza submara tunelo komprenebla al la Markola Tunelo nun konstruata inter Britio kaj Francio. Manĝaĵoj kaj trinkaĵoj ne mankas survoje, vendataj de ĉarmaj knabinoj kiuj puŝas rulveturilojn tra la trajnoj. En Sapporo ni estis bonvenigataj de grupo kun verdaj flagoj sub la gvido de sinjoroj Kimura kaj Kodama, aktivuloj de la Sapporo Esperanto-Societo kiu nin gastigas en la insulo. Post vespermanĝo ni estas veturigataj al la Kristana Centro, moderna hotelo instalita laŭ usona maniero kie nia ĉambro estas rezervita por la daŭro de la 53-a Hokkaido Esperanto Kongreso..... Ni falas en komfortajn litojn kie ni bonege dormas post tiu ĉi laciga tago.

La 30-an de septembro 1989 ni vekiĝis en Sapporo kie ni estis invitataj de la Hokkaido Esperanto Asocio por la 53-a Kongreso, granda travivaĵo por mi ĉar mi estas preskaŭ la sola kiu ĉeestis la unuan Hokkaido Kongreson en 1932. Post la matenmanĝo ni atendis la alvenon de s-ro Kimiharu Kimura, malnova fidela amiko kaj ankoraŭ aktiva movadano al kiu ni estas dankemaj por la organizo de nia tuta programo en Hokkaido insulo. Li venis kun fervora samideanino kiu nin kondukis tra tiu ĉi bela urbo de la Nordo. Ni ripozis en pitoreska parko, vizitis malnovan gubernian domon, poste prenis bongustan ĉinan tagmanĝon. Posttagmeze ni ĉeestis la malfermon de la kongreso en la granda moderna kongresa halo de la Universitato de Sapporo, kies konstruaĵoj estas situataj en vasta tereno kun belaj parkoj kaj lagoj. La Universitato estis fondita de usona profesoro antaŭ jarcento, kio klarigas ĝian amerikan aspekton. La Universitato enhavas ĉiujn fakultatojn en kiuj studas ĉ. 12,000 studentoj. Post vizito al la akceptejo ni ĉeestis la malferman kunsidon kie s-ro Kimura prezentis min al ĉ. 50 kongresanoj al kiuj mi transdonis la saluton de nia Novzelanda Esperanto Asocio. Li klarigis, ke antaŭ 57 jaroj, post la unua kongreso, oni faris fonografan diskon kun mia parolado. Li konservis la lastan ekzempleron de tiu ĉi disko sed eĉ tiu ĉi rompiĝis jam delonge. Feliĉe kaj preskaŭ mirakle s-ro Kimura estis parkere lerninta la tutan tekston kiun li nun deklamis imitante mian voĉon de junulo kiu mi estis antaŭ 57 jaroj. Mia parolado komenciĝis kun la vortoj: "Esperanto naskiĝis antaŭ duonjarcento en la koro de juna gimnaziano Ludoviko Lazaro Zamenhof". Ne multaj okuloj restis sen larmoj kaj por mi ĉi tio estis unu el la plej kortuŝaj momentoj dum mia tuta vojaĝo ĉar mi aŭdis min mem kiel spirito eble

'aŭdis' sian antaŭan enkarniĝon. Elkoran dankon pro via lojaleco kaj fideleco, frato Kimura! Vespere okazis granda bankedo kie, inter variaj kaj abundaj bongustaĵoj ni povis manĝi freŝan kaj fumigitan salmojn kiuj estas specialaĵoj de Hokaido, aparte bongustaj kiam akompanataj de la mondfama biero farata en Sapporo. Min impresis, ke multaj ĉeestantoj estis junaj ĉar tio bonaŭguras por la estonto de nia movado en Japanio.

Tiun ĉi nokton ni dormis en la domo de s-ro Kimura, kio estis granda honoro por ni. La sekvan tagon ni ekskursis kun s-ro Kimura al Nakajama montokresto per aŭtomobilo stirata de fervora esperantisto s-ro Hiroo Kodama de Sapporo. La nokton ni pasigis en luksa japanstila hotelo kun minerala banejo. Post la bano, vestitaj en japanaj kimonoj pruntitaj de la hotelo, ni komforte vespermanĝis laŭ japana maniero sed sidante sur seĝoj! La sekvan tagon ni faris aŭtomobilan ekskurson al la Olimpika ski-saltejo Ookura kaj ankaŭ al alia ski-saltejo atingebla per kabloveturilo. La morgaŭan tagon per trajno kun s-ro Kimura ni veturis al Otaru kie nin gastigis s-ro O.Eguti, malnova amiko kiu ankaŭ ĉeestis la unuan Hokkaido kongreson. Li gvidis nin al alia ski-saltejo ĉar Hokkaido enhavas multajn el tiuj sportejoj vizitataj el la tuta Japanio kaj eĉ el eksterlando en la vintra sezono. Bedaŭrinde ni estis tie en aŭtuno sed ni povis bone imagi la grandiozajn montojn kovritajn de neĝo. La saman tagon ni havis tute alispecan sperton kiam s-ro Eguti nin kondukis al akvario kun fokoj kaj gigantaj dolfenoj kiuj amuzigis nin per mirinda spektaklo dank'al lerta trejnado. Reveninte al Sapporo ni denove vizitis la ĉefan stacidomon kiu estas tiel moderna ke ni havis la iluzion esti en la venonta jarcento. La lastan tagon ni estis kondukataj de kvar gesamideanoj unue al moderna laktofabrikejo en Sapporo kies senmakulaj ŝtalaj instalaĵoj memorigis nin pri Nov-Zelando kie lakto, butero kaj fromaĝo okupas same gravan lokon en la ekonomio kiel en Hokkaido. Poste ni vizitis la Hokkaido Historian Muzeon ĉirkaŭatan de foresta parko. Tie ni ricevis ideon pri la antikva kulturo de la eŭropdevena Ainu popolo, kelkaj el kies posteuloj ankoraŭ vivas en Hokkaido.

Baldaŭ alvenis la tempo de nia forveturo. Post iom solena sed speciale bongusta vespermanĝo grupo de fidelaj gesamideanoj nin akompanis ĝis la kajo de la trajno veturonta al Tokio. Adiaŭ karaj geamikoj kiuj forvidis nin, per miaj spiritaj okuloj mi ankoraŭ vidas la verdan flagon de Kimura San rapide malaperantan de nia horizonto. Elkoran dankon karaj Hokkaidanoj kiuj tiel lerte kunigis nian movadan programon kun turismo. Dank'al s-ro Kimura ĉi-foje ni vojaĝis per moderna dormotrajno en kiu ni trankvile dormis tra la nokto alvenante en Tokio sen ŝanĝo post 16 horoj.

"NOV-ZELANDA esperantisto" 誌 n-ro 490(89, okt.-nov.)から3回にわたって連載された Josef Major さんの "TRIA VIZITO AL JAPANIO" の北海道訪問部分を転載しました。

さんは1932年の第1回北海道大会に参加した honora samideanoです。文中にそのころからの古い amikoj木村喜壬治さん、江口音吉さんや児玉広夫さんが再三登場します。むずかしい単語はありません、ぜひお読みください。

Major さんが夫人の Evaさんとともに昨年秋の第53回北海道エスペラント大会に参加したのは記憶に新しいところです。本文にあるとおり Major

なお木村さんの Majorさん案内記が本誌 n-ro 33に寄せられています。 (編集部)

読書の春！

★ESPERANTO T-ĉemizo

さあ、Tシャツの季節がやって来た！
冬眠から醒めたあなた、★ESPERANTO T
シャツに身を包み、春のエスペラント合
宿にてかけませんか？

白地にあざやかな緑で★ESPERANTO
阿部商会謹製、SMLサイズ取揃え
1枚千円 1750円（消費税不要）
振替 小樽 8-6864 阿部映子 まで

★Kredu min sinjorino!, C. Rosseti. SAT en
Britio刊, 1974, 260p. 無水鍋を売り歩く行商人
の波乱に富んだ日々。ヘマあり、成功あり、恋あ
り、E-i-oへのあてこすりあり……。1300円。

★KULTURO DE LA AMO, V. Szilágyi. T. Aladar 訳。
ハンガリー刊, 1988, 192p. エスペラントは実生
活では役に立たないという妄言を実践によって粉
砕しよう。ハンガリー語との対訳, 1500円。

《注文は、日本エス学会発行と指定して書店で》
上記2冊は春の北海道合宿でも購入できます。

北海道エスペラント観光案内試訳（2）

札幌 金森 美子

Horloĝ-turo (daŭrigo)

En la 16-a de oktobro ĉiujare oni
iluminas la konstruaĵon dum la festo. La
iluminaĵo estas reprezentita, kion oni
prezentis por la unua fojo je la okazo de
la 25 jara datreveno por la fondiĝo de
Sappora Agronomia Altlernejo.

En ĝi oni montras ankaŭ original-
garandan modelon de ĉeval-vagano, kiu
kuris ĝis la 7-a jaro de Taiŝo (1918).

KITAHARA Hakuŝu faris la versaĵon
titolitan "Ĉi tiu vojo". En ĝi li versis
pri la horloĝ-turo ---- "jen blanka tur'
horloĝa". TAKAŜINA Tetuo faris kanton
"Sonorilo de la Horloĝ-turo" kaj ĝi estis
kantita de lia edzino. Ankoraŭ nun la
kanto sonoradas tra la konstruaĵo.

ARIŜIMA Takeo, kiu estas diplomato de
Sappora Agronomia Altlernejo, diris, ke
"sono de la sonorilo estas tre karmemora
al ni - kaj eterne daŭros en la urbo
Sapporo kaj ankaŭ en niaj koroj".

時計台（続編）

毎年10月16日には、その祭りのあい
だ中、イルミネーションを点します。
そのイルミネーションは札幌農学校創
立25周年に点された電飾を再現したも
のです。

時計台の中には大正7年まで走って
いた“馬鉄”の実物大の模型も展示さ
れています。

北原白秋は“この道”という詩を作
り、その中で“そら、白い時計台だよ
”と時計台を詠んでいます。また、高
階哲夫は“時計台の鐘”という歌を作
り、夫人がその歌を歌い、今でも建物
の中にその歌が流れています。

札幌農学校を卒業した有島武郎は、
“鐘の音は、我々にとって懐かしく、
又札幌の街にも、我々の心にも不滅の
音よ”といいました。

日本中の仲間たちが北海道からの参加を (eĉ moralajn) まっている

★東海大会、関東大会に参加しよう！

5月27日は名古屋へ

第39回東海エスペラント大会

1990年 5月27日(日) 名古屋市

エロシェンコ生誕百周年を記念して高杉一郎さんの講演があります。記念品は札幌大会にも参加したユーゴスラビアのスポメンカさんの新著“NE SENDITAJ LETEROJ EL JAPANIO”。

参加費：3000円 不在参加：1500円。

振替口座：名古屋 4-40765 名古屋Eセンター

6月16/17/18日は小田原へ

第39回関東エスペラント大会

1990年 6月16/17/18日(土日) 小田原市

大会テーマは『東欧の民主化とエスペラント』。3日目は大雄山最了寺へのポストコング्रेसです。漢字研究がライフワークというイスラエル人 Jack Halpern (春遍雀来) さんが講演します。

参加費：3500円 不在参加：2000円。

振替口座：東京 2-100201 関東エスペラント連盟

★関西大会、日本大会の申し込みを今すぐに！

6月30日/7月1日は京都へ

第38回関西エスペラント大会

1990年 6月30日(土) 7月1日(日) 京都市

ホンマモンのエスペラント大会。北海道から来たかてソンはせえへんでえ、ソラ関西人のやることやさかい、間違いあらへんがな、という大会。

参加費：3200円 (5/31までは2800円の特典)

不在参加1800円。宿泊等の手配もあります。

振替口座：京都 8-48033 第38回関西大会

★ Aligilo (払込通知表) を同封しました！

8月24/25/26日は横浜へ

第77回日本エスペラント大会

1990年 8月24/25/26日(金土日) 横浜市

ふれあいのエスペラント大会。札幌で出会ったなつかしい仲間たちが待っている。ヤッパ、ハマッ子のやることはトレンディじゃん、という大会。

参加費：北海道は5000円(6/30までは4000円)

不在参加2000円。予約要の番組もあり、まずは参加費を払い込んで、Informilo を読みましょう。

振替口座：横浜 8-68874 第77回日本大会

NE SENDITAJ LETEROJ EL JAPANIO

日本列島5000キロ エスペラント感情旅行——1988年夏、2ヵ月にわたる日本滞在体験記。あなたが札幌の大会のとき interparoli した、あの作家のスポメンカさん Spomenka Štimec の新著です。もちろん北海道のこともてきます。

Zagreb製版、福岡エス会印刷・発行、1990、B5版、65p. 500円。

《注文は書店で。日本エス学会と指定》

★春の北海道合宿でも購入できます。

Edzino de Villon

太宰 治『ヴィヨンの妻』のエス訳
作者晩年の好短編。新潮社文庫(240円)
とパラレルに読むと翻訳の勉強になる。

訳者・竹下外来男は福井県勝山市の医師で、日本文学のエス訳に専心、宮沢賢治“飢餓陣営”などエス訳作品多数。

太宰肖像入り美装本、50p、¥500 送¥175
(62円切手12枚でも可) 注文先は〒454
名古屋市市中川区春田2-32、D-25 三ッ石清

★春の北海道合宿でも購入できます。

Major氏吹込みのレコードのこと

小樽 江口音吉

“La ideo de Esperanto naskiĝis en la koro de gimnazio en malgranda urbo de Polujo, tiu junulo nomiĝis Zamenhof.....” という文を私は良く暗記して口ずさんだものでした。

これは今から50数年前、亀岡のエスペラント普及会で J. Major 氏がレコードに吹込んだもので、私は早速これを買って求めたのです。そして、この喜びを、と、思っ、て他の人に貸したのでした。その後、期間も延びたので返してくれと云ったものの返してくれません。あるいは誤って壊したかもしれません。仕方ないとあきらめました。もうこの人は小樽にいません、逝くなつたはずで、す。このよう、な訳でもう手許にはないのです。残念でなりません。

先般、Major 氏が小樽を再訪したことで一層その感を深くするものです。本人でさえあるいは持っていないものをあの席上で聴かせたら、どんなに有意義であつたか知れません。ウェリントンに遊びに来ないかと云われてももう行けず、再会の喜びを味わっている訳です。

本誌上の「連盟会費の御案内」は不適切

苫小牧 星田 淳

最終ページ「連盟会費のご案内」を次のように正確にする必要がありませんか。「1990年分として払い込まれたものはその年内有効で、その年内に発行された機関誌が送られます……」。

Demandoj① (s-ro 柴田真吾の例) 「89年 9月で会費切れ」の通知があつたが、この場合、これから継続して払う場合どうするか? 3ヶ月を追加するか、ずらして暦年ずつもらうか。②従来の習

慣で、大会参加の都度1年分払って延長していた人が多いが、そのままその大会を含む暦年とみなすか? 検討の上、わかりやすい ANONCO がいるのではないかと思います。

ご指摘ありがとうございます。たしかに前号発送の際、会費期限の記載で一部に混乱があり、ご迷惑をおかけした会員がいました。おわびします。

問題の「3ヶ月」については以前に由仁の新田為男さんから指摘されました。現在は今年の総会の決定にしたいが、総会前、総会時に新年度分として納入された会費は本年12月末までのものとし、総会後の納入もすべて本年12月末までのものとして取扱われています。今後はこの「3ヶ月」の問題は生じないものとご理解ください。

(編集部)

ポートランド(USONO)のエスペラント会

札幌 那須博文

昨年6月～8月、米国に出張した際、Portland市(札幌の姉妹都市)のエスペランティストに会う機会があつた。

出張先のパソコン端末で保健医療情報通信システムを呼びだしてみると、自由に質問応答できるコーナーがあつたので、「Portlandはエスペラントがさかんだと聞いていたが、今なにをやっているか知らせて下さい」と質問をだしておいたら、三人から応答があつた。二つは期待した答えではなかったが、一つは場所や時刻をはっきり示して「6月20日に総会がある」とのこと。

行ってみたらその通り、15、6人が集まっていた。歳とつた人が多かつたが、感心したのは総会の間tute esperanteだつたこと。予定のプログラムが終つて自由なおしゃべりになると英語が出ていたが、立派なものだと思つた。不思議なことに、

この情報をくれた人の名を云っても会員の誰も知らなかった。近く piknikoがあるからと誘われたが、都合があって行けず残念だった。

(苫小牧・星田淳さんの取材)

姉妹都市の縁からこのグループと札幌エスペラント会は、かつて定期的に文通、交流がありました。故・永田明子さんは、こんな交流に熱心だったのを思い出します。この頃聞かないけど、復活させませんか。(la adreson havas Hoŝida kaj veteranoj en SES.)

(星田 淳)

Babilada Kunsido の近況

苫小牧 星田 淳

昨年 5月21日以来、ほぼ毎月集まって babilado を続けてきたが、今年からは Samideanino 山岸悦子のお姉さんの厚意によって札幌市中央区中島公園近くのマンションの一室を借用して開いている。

当初かかげた nur esperante の原則はあるが、現実には半分程度の時間はそれを守っている。その率は参加する人によって上下する。別に会員登録もなく、希望者誰にでも開放されているから、人数も顔ぶれもこの頃毎回変化している。

現状では babilado と文法についての質問、説明が中心。4月から "Gerda malaperis!" の読み合わせ。これは dramo としての演技も ー との野望もあるが果してどこまで? なかなか緊張感のあるサスペンスドラマ。

また、耳で聴く練習も、と 4月から sonbendo による書取り。いま連日報道されているリトワニアの音楽グループの演奏による Litova kanto というdisko の曲を使った。今後も paroli、aŭskulti kaj lerni (gramatikon) を続けていく。

次回は 5月27日(日) 13時から。連絡問合わせは、011-511-2457 S-ino 山岸悦子まで。

Mi nun vivas en Kamagasaki
GOTOO Zyoozi

Kara redaktoro,

Mi ekveturis la 13-an de marto el Sapporo. Unue mi iris al Kanazawa por renkonti mian amikon, vojaĝanto kaj taglaboristo, restadis tie ĝis la 26-a, laboris milve (tobisyoku) kune kun li kaj lernis Esperanton. En Kanazawa mi aŭdis, ke malnova Esperantistino estas tie, sed mi ne povis viziti ŝin, ĉar mi ne povis ekscii sian adreson. Poste mi ekiris sola al Oosaka.

Nun mi estas en Oosaka. Mi loĝas en apartamento, kies areo estas kvar-zyoo-duono kaj la loĝpago kostas dekdu mil enojn. Jam mi komencis laboron en fama kvartalo Kamagasaki. Tia taglaborpaga kurzo estas dekunu mil enoj, sed taglaboristoj devas alveni stacio Sin'imamiya por preni taglaboron ĝis ĉirkaŭ kvar kaj duona horo frumatene. Kiu estas frua, venkas. Efektive taglaboristoj en Kamagasaki laboras ĉ. dekdu horojn tage.

Mi deziras restadi en ĉi tiu loko ĝis julio. Ĉi tie mi taglaboros kaj lernos Esperanton por eksterlanda vojaĝo aŭ mi mem. Mi pensas, ke mi nun provas min. Ĉiam mi pensis ĉi tion kaj nun mi estas plenumanta.

Kara redaktoro, bonvolu sciigi al mi adreson de Kansaja Ligo de E-Grupoj, ĉar mi volas aĉeti Esperantajn librojn kaj vortarojn por mi kaj miaj amikoj en Sapporo.

La red. ĝojas kaj dankas junan k-don GOTOO pro lia letero, kiu jam montras sufiĉan kapablon por nia lingvo. Jen naskiĝis nova laborista Esperantisto. La red. tuj sendis al li adreson de KLEG kaj esperas, ke li sukcesu ĉiumatene atingi stacidomon de Sin'imamiya sen matendormumo.

SALATO

☆出口齋著『神仙の人 出口日出麿』（89年10月、講談社刊）。大本教にエスペラントを紹介し、のちに巨人・出口王仁三郎の女婿となり、大本事件で迫害を受けた高見元男（いま92歳）の境涯。いささか神がかりの感ありだが、当然エスペラントのことが数か所にあらわれる。

☆朝日新聞90年02月23日付朝刊に「残留者から生き方を学ぶ」という記事が。20歳で静岡を出て旧「満州」に渡った父は「郷里の家にエスペラント語で書いた20数冊の日記を残していた。『絶対に開けるな』と言い置いていった」という。

☆朝日03月15日付朝刊・札幌版に札幌の市民グループが計画している「自由学校」のニュース。外国語コースでは英語以外に、アイヌ語、タガログ語、エスペラント語も検討しているとのこと。この自由学校の連絡先、喫茶店ひらひらは Satana Grupo en Sapporo の会合場所。一定の効果あり。

☆その喫茶店にロックバンド MALFERMI のドラマ一募集のチラシが貼ってある。もちろん辞書にある malfermi。メンバーの一人はジョージという芸名で、いま釜ヶ崎に出稼ぎ中でバンドは休業。

☆朝日03月17日付朝刊に東京の石黒なみ子の投稿。シドニーのエスペランチストから手紙を受けとったことも身近で見つける幸せの一つという。

連盟会費のご案内

エスペランチスト、学習者はどなたでも直接、北海道連盟に入会できます。

90年度分の会費（年額2000円）は90年1月～12月分として受領し、当該期間の機関誌をお送りします。連盟会費、購読のお問い合わせは事務局または編集部。

☆Sennaciulo (Sennacieca Asocio Tutmondaの月刊誌) 90年3月号に Satana Grupo en Sapporo が1月に創刊した FRONTE が2ヶ所で紹介されている。評して “Tipe laborista kaj SAT-eca bul-teno kun laboristaj temoj.” 創刊号に Longan vivon といわれるのは、この世界の厳しさのせい。

☆フランスから届いた Laŭte! 90年3-4月号にも FRONTEと同 Grupoの紹介が10行ある。

☆反「連合」の全労協系?の「労働情報」90年04月01日号(308号)に札幌の宮沢直人が「エスペラントを国際連帯に」と題して「労働者のための国際語エスペラントがもっと直接に労働者の国際連帯に役立つべきだ」と投稿している。

☆苫小牧民報90年03月02日付に星田淳が「シェフチェンコとの出会い」と題して寄稿している。1961年に44の言語に訳されたシェフチェンコの詩『遺言』が昨年新版では150言語にふえ、エスペラントを仲介した訳も4言語あることなど。E版モスクワ・ニュースのシェフチェンコの記事のコピーも載っている。

(今号の協力者は渡辺康子さん、豊蔵正吾さん)

★なんでもアリの l-ujo よ／気にせずに進め eter-
naj komencantojよ／結局 Esperanto 使ったもん
勝ちよ／へたでもいいから使ったもん勝ちよ／い
いじゃん／見逃してくれよ／あたしやります！

★編集部の連絡先が下記に変更しました。(KK)

★Heroldo de HEL

n-ro 35 (1990, marto-aprilo)

北海道エスペラント連盟機関誌 隔月刊

編集部：001 札幌市北区北35条西9丁目

3-1-203 カワハラ・カズヤ気付

(電話：011-726-7590)

郵便振替：小樽 0-17075 北海道E連盟

★第35号 (90-marto/aprilo)の発行は結局5月中旬にずれこみました。札幌・滝野の合宿では試し刷りを配布できただけでした。永田明子さん追悼の原稿を早くからいただいていた方々におわびします。もちろん、会員・購読者にも。

★去年の novembro-decembro号も遅れに遅れて、今年の januaro-februaro号と同時発行という連盟史上初の快挙を達成しました。しかしオトコの意地で合併号にはしなかった。

★すべて、編集実務者のわたしの仕事の遅さに原因がありますが、今はある意味で「危機的」です。発行・発送の遅延が慢性化していることもそうですが、あえていいです、ただ二人からの督促以外は誰も何も言っていない方が「危機的」です。反応がないのは、期待もされてなければ、読まれてもないということなのですか。督促してくれた三ッ石清さん、星田淳さんに感謝します。

K I U K I E L

★浜田国貞さんが十勝の足寄町から上川の新得町に。あの松山千春が卒業した足寄高校から新得高校への転任です。新得高校図書室にもPIVが置かれる日もまちか。ご活躍を期待します。新住所は 081北海道 上川郡新得町西二条南七丁目1番地。

★坂下正幸さんも春の人事移動で網走土木現業所から3年ぶりに札幌土木現業所へ。新住所は 064札幌市手稲区稲穂三条七丁目240 道公宅5-101。札幌エス会に強い味方が帰って来ました。

★北見工業大学助教授の大島俊之さんは6月から1年間の予定でアメリカ合衆国留学へ。

★札幌の後藤丈二さんは今号の記事のとおり、3月から大阪市西成区、通称釜ヶ崎に出稼ぎ中。

★反原発運動家でもある札幌の宮沢直人さんも昨年末からの沖縄県伊平屋村の製糖工場を出稼ぎ後、

★合宿参加者は25名、最年少は苫小牧の柴田ひなちゃん 3歳、最年長は横浜の中村栄治さん80歳。Krizantemoが北海道のエスペランチストの発想転換に大きく寄与したと語り継ぐべき歴史的合宿でした。

★ところでTEKO (Tokia E-Kooperativo)の菊島和子さんから北海道エスペラント連盟の会員に“Mi amas Esperanton”のシールとバッジをいただきました。さっそくシールを同封します。バッジは送料の都合で同封できません。62円切手を送っていただければ先着20名にお送りします。

★編集部あてのエスペラントでの手紙、電話にはエスペラントでお応えします。エスペランチストがエスペラントを使わないで誰が使うのですか。わたしの場合ケンカも買います。(KK)

★合宿を終えてほっとしています。菊島さんの参加で充実した合宿になりました。何人もの参加者から“来年もこんな合宿を”といわれたことが励みになります。(馬場)

編 集 部 :

カワハラ・カズヤ : 〒001 札幌市北区
北35条西 9丁目3-1-203 ☎011-726-7590

馬場恵美子 : 〒001 札幌市北区新琴似
7条 8丁目5-34 ☎011-761-8060

合宿に合わせて札幌に帰って来る予定でしたが、国際花博電力館、大阪鶴見署を経由したため間に合いませんでした。電話の声はいたって元気。ほんねで行動するからたのしい。

★編集部のカワハラ・カズヤも転居しました。近所に親戚でもない河原姓が2軒もあるので、郵便物にはカタカナで氏名を書いてくれると誤配がなくありがたい、といっています。